

# 契沖の声点注記について

坂本 清甫 氏

【キーワード】 契沖のアクセント注記 平声点 平声の軽の点 『和字正濫鈔』 『和字正濫通妨抄』

## 要旨

契沖の声点表記法のうち、語單位に声点を一つ差す第一種表記法による多拍語への差声については、未だ詳しい考察がなされていない。本稿は、この第一種声点注記法とその示す声調について、原本調査を行ない検討をしたものである。第一種表記法では、平声の軽の点を使用されず、平声・上声・去声の点で、それぞれ下降調・高平調・上声調を表す。また、第一種表記法の声点は、おむね語全体の声調を表すが、場合により前部要素の声調のみを表すこともある。平声点については、一字めに差す場合と最終字に差す場合との二種の表記法があり、使われかたに資料による片寄りがある。ともに下降調を示すことに変わりはないが、実際には異なる下降調を示すために使い分けられたものと思われる。

## はじめに

契沖の著した仮名遣い書には、声点の差された箇所があり、それについてはすでに金田一春彦・馬淵和夫・前田富祺・望月郁子による論考がある<sup>①</sup>。金田一分類によると、その声点表記法には、語單位に声点を一つ差す第一種表記と、文字ごとに声点を一つずつ差す第二種表記とがある。別稿で述べたが、両者は、同じ四声観に基づき、アクセントの別による定家仮名遣いを論破し、契沖の仮名遣い説を立証するために使い分けられている<sup>②</sup>。仮名への第一種表記による差声を、金田一氏は、語全体の音調を示したものと解せられるが、第一文字だけの音調を示したとし、前田氏は、語全体の音調を示したものとしている。しかし、これについての具体例からの検討がなされていない。本稿では、未だ詳しい論考のない、多拍語への第一種表記の差声法と、その示す音調の推定などを中心に考察を行なう。

本稿で扱う契沖注記の声点は、①国学院大学図書館蔵『和字正

濫鈔」自筆稿本乙本記載（ただし、朱圈点のうち刊本に刻されていないものは、朱色が他より濃く、圈点もやや大きい。あるいはあとから書入れたか、別筆の可能性もあるか。）①、②『和字正濫鈔』元禄八年刊本記載、③北野天満宮蔵「和字正濫通妨抄」元禄十年八月成立記載（ただし、言葉のアクセントを反映するものではない。「常のいろは」の声点はとりあげない）、④三手文庫本「和字正濫鈔」元禄八年刊本への自筆書入れ記載である。成立は①から④の順である。引用に当って、①自筆乙本、②刊本、③『通妨抄』、④書入れ、と略称する。『和字正濫要略』にも差声があるが、確実な声点を伝える写本を未だみることができないので今回は考察から外す。

なお、本稿では、声点は差された語のあとに◇で示す。平声点はへ平▽、上声点はへ上▽、去声点はへ去▽、平声の軽の点はへ軽▽とし、声点のないものはへ×▽とする。掲出箇所などは、稿末に、声点表記ごとの一覧表で示した。

### 一 平声の軽の点

契沖は日本においては、平・上・去の三声で声調を表し、それぞれ、下降調・高平調・上昇調を示すと考えており、下降調は平声の軽で示すこともある。この下降調を示す「平声の軽」と「平声」について、前田氏は、厳密な言い方をする場合「平声の軽」を用いるという。また、望月氏は「平声の軽」は調価そのものを、「平」「平声」は差声位置をいうとする。さらに望月氏は、「和

字正濫鈔」の「鴨」に平声の軽の点が差されているのは、「平声の軽は字の中ほとんどもに声をさし」と位置を明示したため、それに続く記述の「鴨」には「平声の軽」を差さざるをえなかったとし、「鴨」に関する差声を例外的な差点として扱っている。

「平声の軽」の記述については、別稿で述べたが、アクセント仮名遣い論破に関わる記述に用いられているものの、契沖にとっては、日本における「平声」との明確な区別はない。「平声の軽」といって平声の軽の点を差しているのは②刊本の「鴨」だけであるが、望月氏の使用分けは認められない。そこで、「平声の軽」と平声の軽の点の関係について見直してみる。

まず、取り扱う資料に差された平声の軽の点を見る。①自筆乙本「いろへ×軽▽」、②刊本「琵琶へ軽平▽」「鴨へ軽▽」、③『通妨抄』「ゆめへ軽平▽」「にはへとへ軽平平平▽」にある。

「いろへ×軽▽」は平仮名へ第一種表記法で差声している。①自筆乙本は、二で詳しく述べるが、稿末の「平声点B表記」の表のとおり、下降調表記はへ×平▽へ××平▽であり、特にこの例だけへ×軽▽で表す必然性がない。また、④書入れに「いろへ×平▽」とある。

一方、③『通妨抄』の二例は平声点を平声の軽の点に訂正したもので、確実な例である。二例とも「根本以呂波」の例で、第二種表記の語頭に差されたものである。また、②刊本の「琵琶」への差声も第二種表記法。「鴨」は第一種表記法の例ではあるが、一つの文字に一つの声点を差している例でもあり、第二種表記の例として取り扱うことも可能である。

なお、「鴨」は、「鴨河・鴨社」とともに複合により「鴨」のアクセントが異なる例として挙げられた例で、①自筆之本には、単独の「鴨」にのみ声点が差されていない。平声の軽の点を差すことを躊躇したのであろう。強いて平声の軽の点を差さなくとも、平声で同じ声調を表すからである。

つまり、平声の軽の点は、第二種表記法の語頭のみを用いられる点である。第二種表記法は、第一種表記法に比してアクセント型まで表記するものであり、アクセント表記の面からは厳密にアクセントを表記するのに用いているといえる。

次に、「平声の軽」の記述と声点の関係についてみる。「平声の軽」とあって平声の軽の点が差されているのは先に述べたとおり、②刊本の「鴨」のみ。あとは「平声の軽」とあって、平声点差声の例のみである。③『通妨抄』のアクセント仮名遣い論破の部分に「青葉へ平××」「青苔へ平××」「青羽の山へ平×××」「まひへ平××」「つかひへ上平××」「おもひへ平×××」。前田氏は「まひ」の「ま」の平声点と、「おもひ」の「お」の平声点を平声の軽の点と認定しているが、原本を閲覧し、ともに平声点とみた。「おもひ」は三拍第二類動詞の連用形の場合●○○のアクセントを持っていた。三拍第二類動詞終止形も当時●○○のアクセントであったが、これらは、二で詳しく述べるが、稿末の「平声点A表記」の「いとむ」「いとむ」のようにいずれもへ平×××で表記されている。「おもひ」だけを「平声の軽」とあるからといって、へ軽×××の誤点と認める必要はない。ただし、第二種表記法の「まひ」は先の「ゆめ」「にはへと」のよう

にへ平××からへ軽××に訂正される可能性もあったろう。

③『通妨抄』の訓漢字表記、「青葉・青苔・青羽の山」の「青」には声明の節博士「徵角」が施されており、「青」の部分が●○という下降調である。平声点は「青」への部分差声であるが、実際には語アクセントを示すことにもなるので、第一種表記法としてよい。第一種表記には平声の軽の点はないのである。なお、平声点を差した文字に「徵角」を施し、下降を表すものとしては、『補忘記』の「出合」の例がある。契沖がその表記法を参考にした可能性もある。

契沖は、アクセント仮名遣い論破のために声調についての記述を行なったが、それには語単位に平・上・去のみの声調を示せば十分であり、第一種表記がそれに適した差声法である。これには平声の軽の点はいらない。しかし、アクセント仮名遣い論破には個々のアクセント型を表記する必要も生じ、第二種表記も用いている。それでも平声の軽の点の差声を、簡単には行なわなかった。①自筆之本の「鴨」には声点がなく、③『通妨抄』の「ゆめ・にはへと」でも一旦平声点を差したのちに書き換えている。

契沖は、差声に当り、第一種表記法で足りる場合には平声点で済ませ、第二種表記を用いて詳細なアクセント型を示す必要がある場合に限り、語頭の●○の下降調に平声の軽の点を差している。

## 二 平声点

### 「二一」二種類の第一種平声点表記

四声観は「正濫抄」で固まったとしても表記方法は時を追って  
改変された可能性もある。特に、平仮名への第一種平声点の差声  
法は、平声点の差声位置に、一字めに差す場合と最終字に差す場  
合があるが、資料による異なりがみられる。

上声点と去声点とは、もともと漢字の上部に差すものであるか  
ら、仮名表記された語全体に一つの声点を差すというアクセント  
表記法でも、語の第一字めの上部に差せばいい。これらは常に位  
置が固定しており、拍数が増えても表記法に変わりはない。しかし、  
平声点は漢字の下部に差すものであり、仮名表記の多拍語への差  
声に、A・上・去に合せ、一字めに差す場合と、B、同じく下部  
ということ、最終字に差す場合の二種類の表記法ができた。

平声点にみられるこの二種類の表記法は稿末「平声点A表記」  
「平声点B表記」に示したように、資料による片寄りがみられる。  
①自筆乙本にはBのみ。②刊本には第一種表記による上声点・去  
声点はあるが、平声点はA・Bとも例がない。③「通妨抄」にはB  
が一例あるのみで、あとはすべてA。④書入れにはA・B両表記。

自筆本しか存在しない③「通妨抄」や、④書入れにA・B両表記  
がみられることから、A・Bとも契沖自身が用いた表記法としてよ  
いだろう。A・Bは同じ下降調を担うのか、それぞれが異なる下降  
調を担うのか、また、差声の時期が資料の成立と同様に①から④  
の順であるのかどうかも検討の必要がある。

②刊本に①自筆乙本のB表記朱声点は刻されていない。また、  
B表記の①自筆乙本と④書き入れの差声語は共通するものもある。  
①④B表記の声点は②「正濫抄」刊行後、同時期に書き入れられ

たとも考えられる。しかし、本文の成立と差声の時期を分けて考  
えるに当たったの根拠が今のところないので、これについての言  
及は行なわないことにする。

A・Bの担う音調には差異が認められるのかどうかについては、  
アクセント史の観点から考察が可能と思われるので、以下これに  
ついてのみ検討を行なう。

#### 「二一」第一種平声点の声調

まず二拍語は、①自筆乙本に「いはへ×平」(岩)、「」、③「通  
妨抄」に「いろへ×平」(色)、「あぬへ×平」(犬)、「」、④書  
入れに「をるへ×平」(居)、「」、「いろへ×平」(色)、「」、「おとへ  
×平」(音)がある。①の「岩」は二類で●○。③はともに仮  
名遣いと声調が無関係である論拠として掲げられたもので、差声  
語例の下に「平」の注記もある。「色」「三類・音」「二類で●○、  
あぬ」は古く「十和・廿和・前和」「観名」「色葉」にへ上上  
とあるが、契沖は「犬いぬ／あぬ」を相通の例として挙げており  
（「通妨抄」一〇才）、三類「いぬ」と同義と考え●○を示した  
と考えられる。二拍語では、へ×平×へ×平×ともに●○を示す。  
③でB表記の使われたのは二拍語の「色」のみである。これは、  
「同字にして三声かはれるにあらすや」として、「いろへ×平」  
平、いろこのみへ上××××上、いろへへ去×××去」のよ  
うに「色」との複合語で「色」部分のアクセントが異なる語例と  
して挙げられたものである。この例は仮名表記であるが、訓漢字  
「色」への差声と同様に扱うべきものと考えられる。上声の例の

「いろいろこのみ」についても、「色」部分への差声であり、語全体が高平調であることを示しているのではないだろう。契沖は、同義語の仮名遣いは同一のものであるという仮名遣い観をもっており、同義部分のアクセントだけが問題になるのである。

AB両表記で下降の調価に差異が生じる可能性のあるのは、三拍語以上の場合である。まず、A〈平××〉については、三拍語では③『通妨抄』に「あげた(井桁)」「いとふ厭」「いとこ(従兄弟)」「いとむ(挑)」「をんな(女)」「おこじ(へ鱈魚)」「おもひ(連用形)」のみ。④書入れには、「をこじ(へ鱈魚)」「をさむ(治)」「ただし、声点にしてはやや大きすぎる)」「をんな(女)」。Aの〈平××〉は●○○を示すものである。その理由は、「用は平声の軽」とした「つかひ(上上上)をつかひ(上上上)まひ(上上上)をまひ(上上上)人をおもひ(上上上)かやうなる時は用也。(一三〇ウ)」という記述による。これは、金田一氏の第一種表記法と第二種表記法が使われ、不統一のようにも見える。まず、第二種表記の〈上上上平〉〈上上上〉は、三拍動詞一類の「使ふ」・二拍動詞一類の「舞ふ」の連用形を「用」、平声の「軽」としている。この一類動詞連用形は〈平××〉という第一種表記法では表わせない下降調アクセントであったのではないか。

一類動詞の連用形は●○○であり、〈平××〉ではこれを表せない。この、〈上上上平〉という表記にした。それ以外にここに第二種表記法を用いる理由がない。一方、三拍動詞二類「思ふ」の連用形は「平声の軽」であり、●○○のアクセントであった。「平声の軽」は、●○○でも●○○でもかまわない。しかし、同じ下降

調でも、差声という実際のアクセント注記には●○○と●○○を区別した。A・Bが異なる下降調を注記するのであれば、●○○はA、●○○はBを示し、第二種表記法を使う必要がなかったともいえる。三拍以上の語にB表記のない③『通妨抄』では●○○をA表記、●○○を第二種表記で示している。B表記のある④書入れには、第二種表記が用いられておらず、B表記で●○○を示した可能性がある。

Aの他の〈平××〉の差声のものについては、「井桁」はアクセント史の資料に欠けるが、現在京都●○○。「厭ふ」「挑む」「おもひ」は共に三拍動詞二類、「治む」は三・四拍動詞二類で、いずれも近世期には終止形●○○であった。「従兄弟」も三拍五類で近世期●○○であった。「女」は二類名詞で『平家』『近松』とも●○○、現在京都・大阪は●○○の变化を経たもの。特殊拍を含むので契沖が●○○のアクセントを注記したとも考えられよう。「おこじ」は「観名・鎮名」「京和・十和」に〈上上上平〉とあり、体系変化を経て○○○●○○になったと思われる。ただし、近世使用語形が「おこじ」から「おこぜ」に変わる。●○○●○○の变化が起こったのであろう。Aの〈平××〉は●○○を示すと推定できる。

Bの〈上上上平〉の差声の語は、①自筆乙本に「いろけ(喘息)」「いろこ(雲脂)」「いろと(弟)」「いろね(兄)」、④書入れに「いろえ(兄)」「いろと(弟)」「いろは(母)。「いろけ」「いろえ」はアクセント史の確例なし。「いろこ」は「京和・伊十」に〈上上上平〉、「鎮名」に〈上上上平〉、現在京都●○○

○。「いろ」とは「前和」「前紀・嘉紀」に「平平平」<、「弘紀・巫私」に「平平上」<、「巫私」に「上上上」<、「前紀・乾紀」に「上上上」<。「いろね」は「図紀」に「上上上」<、「丙私」に「平平上」<。「いろは」は「観名・鎮名」「巫私」に「平平上」<、「内紀」に「上上平」<、「前和」に「上上上」<、「右紀」に「上上上」<。アクセント史資料からは、Bが、●●●○○○○どちらを注記しようとしたものが断定できない。×××平<を施したのは「平平上」<では表わせないアクセントだったからとすれば●●●○か。四拍語の「いろくつ」を含み、三拍語以上のB表記語はすべて「いろ」という共通の部分がある。何か特別な差声理由があるのかもしれない。

四拍語のA「平平上」<は、③『通妨抄』に「いとなむ」、④『正濫抄』書入れに「おどろく」の二例。「営む」は「観名・高名」に「平平上」<、「観名」には「平平平」<も、「平家」に連体形●●○○。「驚く」は「観名・高名・鎮名」「図紀・前紀」に「平平上」<。「観名」に「平平平」<も、「補志記」に「徴徴角角」<、「平家」に連用形●●○○。ともにいわゆる二類動詞であり、近世京都は●●○○である。金田一氏によると、中世期以降の終止形●●○○は連体形○○○○の変化形であるが、動詞によっては、○○○○から一気に●○○○に変化したものもあるという。『観名』にみられる「平平上」<と「平平平」<の揺れは、三拍動詞三類○○○○から二類○○○○の揺れが見られたように、四拍二類動詞○○○○の三類動詞○○○○への移行の現われではないだろうか。この類推変化には遅速があり、体系変化後は

○○○○<●○○○と○○○○<●○○○の二種の終止形ができたであろう。やがて●○○○は、連体形に侵蝕され、●○○○という四拍三類動詞とまったく同じアクセントを持つようになったのではないか。『補志記』は三拍動詞をみても連体形の終止形侵蝕が起こった形を反映しているので、四拍二類動詞●○○○は侵蝕後のアクセントであろう。契沖は、三拍一類動詞終止形を連体形に侵蝕される以前の●○○○という下降調で注記しているところから、四拍二類動詞の「平平上」<も、侵蝕前の●○○○を示すものと考えられる。●○○○は現在徳島市などにみられることから、契沖は当時の京都・大阪ではなく、その周辺のアクセントを持っていた可能性がある。

四拍語へのB「×××平」<は、「いろくつ(鱗)」で、『京和』『観名』『字鏡』に「平平上」<、「補志記」に「徴徴角角」<、現在京都●●○○。●●○○を注記したものか。

以上、平声のA表記の「平平上」<「平平上」<は、第一拍から第二拍にかけての下降調○○○○・○○○○を示そうとした差声である可能性が高い。B表記は同じ下降調でもA表記が示す声調と弁別するためのものとすれば、「×××平」<「×××平」<は●●●○○○○を示そうとした差声と考えられる。しかし、下降調の型は、四拍語以上には、A B二種の表記では不足する。A表記が第一拍から第二拍への下降を表す部分差声で、B表記は、第一種去声点が最初の上昇調を示すのみのものであると同様、下降調であることのみを示すのか。ただし、この場合も三拍語では、Aが●○○○を示すので、Bは●●○○を受けもつことになる。

「二二三」漢字表記語への平声点

二拍語〈平×〉は、①自筆乙本②刊本に「橋」「弦」「公」「天」、③「通妨抄」に「居」。これらは語単位と文字単位とが同じ差声になる。

①②の「橋・弦」は単に三声の例として挙げられたものである。「橋」「弦」は二類で●○、「公」は『平家』に●○、「天」は『国訛』に●○、「居」をる」は現代大阪・京都で●●より●○が優勢であり、近世も●○であろう。仮名表記にも④書入れに「をるへ平××」がある。

三拍語以上は、③『通妨抄』に、「青葉へ平××」「青苔へノリ」〈平×××〉、「青羽へ平××」の山」と「井本（キノモト）へ平×××」。「青」との複合例は「平声の軽」と説明しながらも、平声の差声をしたもの。一でも述べたが、「青」への部分差声である。〈平××〉を仮名への差声と同様に考えれば、平声点は次の文字にかけての下降を示すことになり、「青葉」は●●○、「青苔」は●●○となる。しかし、●●○・●●○ではなく、第一字めの文字内で下降する●○○・●○○○を示すために、「青」に声明の節博士「徴角」がある。しかし、訓漢字の平声点は、たとえ「徴角」がなくても「青」のみの部分差声であるから、●○を示すのである。

「青葉」は「散木注」に〈平平上×〉、体系変化を経て○○○×●○○であったろう。現在大阪は●●○と●○○○の両型。「青苔」は「甘和・京和」に〈平平上平×〉があり、○○○●○×●○○○の変化を経たもので、現在京都・大阪●○○○である。」

青羽の山」「井本」は史的アクセントは不明だが、平声の例として「通妨抄」に「あおはのやまへ平××××××」もある。

### 三 上声点

「三一」平仮名表記語への上声点

仮名への第一種差声の問題は、語の前部のみが高平調になる部分差声になっていないかである。

二拍語は、〈上××〉②刊本に「いる（铸）」、「③『通妨抄』に「いと」副詞」「まひ（舞）」「名詞」。

「铸る」は、『平家』に連用形●○があるが、現在京都・大阪同様●●を注したと考えられる。副詞の「いと」は古くは、『因名・観名』「前紀」などに〈上平×〉とあるが、『平家』に●●の例がある。「舞」は、一類動詞連用形から派生した二拍一類名詞で、●●である。

三拍語は、〈上×××〉③『通妨抄』に「いとど」副詞」「いとま（暇）」「うたひ（謡）」「こおけ（小桶）」「つかひ（使）」「ゑのこ（犬子）」、④『正濫鈔』書入れに「いひね（石解）」。

「いひね」「ゑのこ」には確例なし。「いとど」は「伏片」に〈上上上×〉。「謡・使ひ」は、ともに一類動詞連用形からの派生名詞で●●。「小桶」は現在京都●●●。

五拍語は、〈上×××××〉③『通妨抄』に「あをかつら（防己）」「いろこのみ（色好み）」。「防己」には『京和』に〈上上上上平×〉、現在京都●●○○○、「色好み」は現在大阪●●○○○

である。

「色好み」については、「いろ」への部分差声である可能性を「二二」で述べた。「防己」も平声の「あおほのやま」と同時に例示しているところから、語全体の高平調を示すというより、仮名遣いが問題になる同義部分の「青」が高平調であることを示す差声と考えられる。

〔三一〕漢字表記語への上声点

二拍語へ上へに、①自筆乙本②刊本に「端」「釣」「孔」。③『通妨抄』「江戸へ上へ」の例。四拍語へ上へに、①自筆乙本・②刊本「鴨河」、③『通妨抄』に「井上」。

「端」は文字単位への差声ともできる例であるが、一類名詞で●●。「釣」は一類動詞で●●。「孔」は確例なし。「江戸」は●●。「近松」に●●。「鴨河」は、「袖高」に「カモ河へ平平上へ」、現在京都は●●。「井上」にはアクセント史の確例はない。別稿で述べたが、訓漢字で表記された複合語のうち、全体が下降調で前部成分が高平調である場合に、第一種表記法での上声点が差されることはない。上声点が差された「鴨河」「井上」は語全体が高平調であるのみでよいのだろう。

#### 四 去声点

第一種表記法の平声点・上声点は、高起式アクセントの語を下降調が高平調であるか弁別し、さらにはアクセント型までも表す

可能性がある。それに比して、第一種去声点は、低起式つまりは上昇調であることだけを表し、有核か無核かは全く関係ない。

〔四一〕平仮名表記語への去声点

二拍語へ去へは、②刊本に「いる(熬)」、③『通妨抄』に「いと(糸)」「あむ(咲)」「おけ(桶)」。

「熬る」は「色葉」にへ平平だが、現在大阪○●。「糸」は「十和・廿和・京和」「図名・観名」「後拾」「永古」にへ平上へ、「平家」「近松」現在京都・大阪○●。「咲む」は「色葉」「巫私」にへ上平へ、「平家」に●●で一類動詞相当だが、現在京都・大阪○●で二類動詞相当。「桶」は現在京都・大阪○●。

三拍語へのへ去へは、③『通妨抄』に「るづつ(井筒)」「えぼし(烏帽子)」「をとめ(少女)」「をとり(媒鳥)」、④書入れに「をさた(他田)」「をど(少男)」「をとめ(少女)」。

「他田」には確例なし。「烏帽子」は「平家」に●●だが、現在大阪○●。「少女」は「巫私・人紀」にへ平上へ、「高名」「巫私」にへ平上へ、「高貞・京秘」にへ上上へ、現在大阪○●。「少男」は、三拍四類名詞で近世期●●であったろう。『通妨抄』では、へ上上へへの注記がある。契沖がこの語に●●と、●●○のアクセントを持っていたのであろう。あるいは、「通妨抄」は自筆であるが、④書入れの差声は、契沖以外の人物を考えるべきか。

四拍語へは、「いはむや(去へへへ)」「①自筆乙本、「いろくへ去へへへ」③『通妨抄』、「をちこち(去へへへ)」③『通妨



抄」と④書入れ。

「いはむや」は現在大阪●●●○。「いろく」は、「近松」に低起式の例、現在京都・大阪○○○○○。「をちごち」は、「古毘」にへ上平上平、現在大阪●○○○●○○○。

六拍語に「みやまをろし」への差声がある。これは「やまおろし（声点なし）」とともに挙げられた例であるが、「みやま」部分が朱の書入れであり、声点も朱で、「み」の上声点とも、「を」の去声点とも考えられる。アクセント史の確例もないので、考察は控える。

以上、「いはむや」を除けば、第一種去声は低起式アクセントを反映している。

〔四一〕漢字表記語への去声点

二拍語のへ去に、①自筆乙本②刊本「鶴」「箒」「貫（コウ）」、へ去×に③「通妨抄」「井戸」。三拍語のへ去×に、①自筆乙本「天狗」「天女」「上野（かんつけ）」、②刊本「天狗」「天女」、③「通妨抄」「井筒」、④書入れに「媒鳥（をとり）」「尾張」。四拍語のへ去×に、①自筆乙本・②刊本に「天神」「天台」「天王」。五拍語のへ去×に、①自筆乙本「上総（かみつふさ）」。六拍語のへ去×に、①自筆乙本・②刊本「鴨社（かものやしう）」。

「鶴」は五類で○○、「箒」は四類で○○、「貫」は確例なし。「井戸」は「近松」に低起式例、現在京都・大阪○○●○○。「井筒」は「近松」に●●○○●×、現在大阪○○●○○。「天狗」

は現在大阪○○●。「天女」は現在大阪●○○。「天神」は「近松」に低起式例、現在大阪○○○○●。「天台」は現在大阪●●●●。「天王」は「平家」に○○●●●、現在大阪○○○○●。「鴨社」は確例がないが、「かもの」に「袖天」へ上平上平、「袖高」へ平平平、「平家」○○●●。

「かんつけ」「かみつふさ」の差声例はないが、「国訛」に「上野（かうつけ）」●○○○、「上総（かづさ）」●●○○の例がある。現在京都は「コースケ」●○○○●●●●、「カズサ」○○●●○○○。 「かみ」は二拍四類●●である。秋永氏によると、助詞の「つ」は、古くは「つ」まで低起式の高さを平らに保とうとする傾向があり、院政期・鎌倉期にへ上平上平のように「つ」が上声となるといふ。近世期には体系変化を経て、「国訛」のような高起式になったであろう。この二例はともに、契沖が「みもしをうといふ類」として挙げられたものであり、「かん」の読みは、当時の使用語形例ではない。また、「上」の字への差声は、刊本には省略されている。「かみ」を「かん」と読む例に挙げるに当たって、「かんつけ」「かみつふさ」という複合語のアクセントではなく、前部成素である「上」のアクセントを差声したのであろう。

## 五 まとめ

契沖の第一種表記法での多拍語への差声について、アクセント史の観点から検討を行なった。明らかにしたことをまとめる。

一、第一種表記法で使われる声点は、平声点・上声点・去声点で、平声の輕の点是用いられない。平声の輕の点は、第二種表記法の語頭に用いられる点であるが、その場合にも平声点と担う声調に変わりはない。

二、第一種表記法の声点は、おおむね語全体にかかり、高平調・下降調・上昇調を表す。しかし、同語部分が複合によって、アクセントが異なる例として挙げられたものについては、上声漢字表記語を除き、同義部分への差声をしている。

三、第一種表記法の平声点は、一字めに差す場合と、最終字に差す場合とが見られる。一字めに差された平声点は、一字めから二字めにかけての下降調を示す。最終字に差された平声点は、一字めから二字めにかけての下降以外の下降調であることを示す可能性がある。なお、この二種類の平声点は資料による片寄りがある。

四、第一種表記法で表された高起式アクセントは、上声点と二種類の平声点により、アクセント型も示される。

なお、本稿は、平成四年国語学会春季大会で発表したものを、第一種声点表記法を中心に改稿したものである。原本閲覧にあたって、棚町知彌氏・築島裕氏ならびに賀茂別雷神社・北野天満宮・国学院大学図書館のご当局に多大なご高配をいただいた。ここに御礼申し上げます。

注(一) 金田一春彦「契沖の仮名遣書所載の国語アクセント」『国

語と国文学』二〇一四(一九四三)「国語のアクセントの時代的変遷」『国語と国文学』三七一〇(一九六〇)

馬淵和夫「『いろはうた』のアクセント」『国語学』二二(一九五五)のちに『増訂日本韻学史の研究』一九八四年所収。

前田富祺「契沖のアクセント観」『文芸研究』四〇(一九六二)「近世における国語アクセント観」『国語学』七一(一九六七)

望月郁子「『仙源抄』跋文の語調標示の方法とその発想―覚え書き―」『常葉女子短期大紀要』五(一九七三)のちに『類聚名義抄の文献学的研究』一九九二年所収

(2) 拙稿「契沖の定家仮名遣い批判―四声観との関係から―」『国文学研究』一〇九(一九九三)

(3) 『契沖全集』第十卷(岩波書店 一九七三年)刊行以降、国学院大学に所蔵されたことを築島氏にご教示いただいた。

(4) 注(2)の築島裕氏の解題による。

(5) 注(2)拙稿。

(6) 金田一春彦『国語アクセントの史的研究 原理と方法』(稿書房 一九七四) 三九〇頁

(7) 注(6)に引き続き「現在の甲種方言のうち、徳島市の方言・今治市の方言などでは、第二種四拍動詞を●○○○型に発音している。あるいは古い連用形・終止形の○○●○○型からの直接の変化かもしれない。」とある。また、平山輝男編『現代日本語方言大辞典』第一卷(明治書院 一九九二)にも、

徳島市方言のアクセントのうち、二類動詞を●○○○で示した例がある。

(8) 注(5)拙稿。

(9) 秋永一枝『古今和歌集声点本の研究 研究篇上』(校倉書房 一九八〇)一二五頁に詳しい考察がある。

(10) 中井幸比古『便用謡』とアクセント』『音声学会会報』

一九九(一九九二)

(11) 秋永一枝『古今和歌集声点本の研究 研究篇下』(校倉書房 一九九二)一五三頁

アクセント引用文献「略称」

望月郁子『類聚名義抄四種声点付和訓索引』笠間書院

『図書寮本類聚名義抄』勉誠社「図名」

『類聚名義抄』八木書店「観名(観智院本)」

『三宝類聚名義抄』勉誠社「鎮名(鎮国守国神社本)」

『三宝類字集』八木書店「高名(高山寺本)」

馬淵和夫『和名類聚抄古写本声点本文および索引』風間書房

『十和(伊勢十卷本)』『廿和(伊勢廿卷本)』『京和(京本)』『前和(前田本)』

『色葉字類抄』勉誠社「色葉」

『字鏡(世尊寺本)』古辞書音義集成六巻汲古書院「字鏡」

鈴木豊『日本書紀神代卷諸本声点付語彙索引』アクセント史資料索引七「弘紀(弘安本)」「乾紀(乾元本)」「嘉紀(嘉暦本)」「神紀(神代卷諸本)」

鈴木豊『日本書紀人皇巻諸本声点付語彙索引』(未定稿による)「前紀(前田本)」「内紀(内閣文庫本)」「右紀(兼右本)」

秋永一枝『古今和歌集声点本の研究索引篇』(校倉書房)の諸本のうち「伏片(伏見宮家本古今和歌集)」「高貞(高松宮家貞応本古今和歌集)」「京秘(古今秘註抄)」「昆古(昆沙門堂本古今集註)」

秋永一枝『永治二年本古今和歌集声点付資料ならびに声点付語彙索引』顕昭後拾遺抄注・顕昭散木集注声点付資料ならびに声点付語彙索引」アクセント史資料索引三「永古」「散木注」

秋永一枝・後藤祥子『袖中抄声点付語彙索引』アクセント史資料索引六「袖天(天理本)」「袖高(高松宮本)」

上野和昭『御巫本日本書紀私紀声点付和訓索引』アクセント史資料索引二「巫私」

金井英雄『補忘記語彙篇博士付和語索引』アクセント史資料索引九補忘記」

秋永一枝『言語国訛竹拍園旧蔵本影印ならびに声譜付語彙索引』アクセント史資料索引一「国訛」

坂本清恵『近松世話物浄瑠璃胡麻草付語彙索引体言篇』アクセント史資料索引五「近松」

『平家正節』大学堂書店「平家」

坂本清恵『近松世話物浄瑠璃胡麻草付語彙索引体言篇』アクセント史資料索引五「近松」

平声の軽の点

語彙	意味	声点	注記	掲載書目	箇所
1 いろ	<色>	×軽	朱圈点	①正濫抄	1, 21オ
2 鴨	<かも>	軽	墨圈点印刷, 本文「平声の軽」	②正濫抄	5, 48ウ2
3 琵琶	<びは>	軽平	墨圈点印刷, 「琵琶」線に双点	②正濫抄	4, 43オ
4 ゆめ	夢	軽平	墨圈点, 根本以呂波	③通妨抄	1, 54ウ4
5 にほへと	匂う	軽平平	墨圈点, 「に」平から軽に朱で訂正, 「と」双点, 根本以呂波	③通妨抄	1, 54ウ2

平声点A表記

語彙	意味	声点	注記	掲載書目	箇所
1 めぬ	犬	平×	墨圈点, 「平」の注記	③通妨抄	1, 17ウ7
2 をる	<居>	平×	朱圈点書入れ	④正濫抄	3, 4オ
3 いとふ	厭う	平××	朱圈点, 「平声」	③通妨抄	1, 20オ9
4 いとこ	従兄弟	平××	朱圈点, 「平声」	③通妨抄	1, 20オ9
5 いどむ	挑む	平××	朱圈点, 「平声」の注記	③通妨抄	1, 20オ9
6 おもひ	思【動詞】	平××	朱圈点, 「平声軽」	③通妨抄	1, 38ウ12
7 あげた	并桁	平××	墨圈点, 「平」の注記	③通妨抄	1, 17ウ6
8 をこし	<鱧>	平××	朱書入れ, 墨圈点	③通妨抄	1, 17ウ10
9 をこじ	<鱧魚>	平××	朱圈点書入れ	④正濫抄	3, 6ウ
10 をさむ	<治>	平××	朱圈点書入れ, ただし声点にしては大きすぎる	④正濫抄	3, 7ウ
11 をんな	女	平××	墨圈点, 「平」の注記	③通妨抄	1, 17ウ10
12 をんな	<女>	平××	朱圈点書入れ	④正濫抄	3, 5ウ
13 いとなむ	営む	平×××	朱書入れ, 圈点, 「平声」	③通妨抄	1, 20オ9
14 おどろく	<驚>	平×××	朱圈点書入れ	④正濫抄	3, 21オ
15 あおほのやま	<青羽山>	平×××××	朱圈点「を」を「お」に訂正, 築島「お」の上声に注記	③通妨抄	1, 17オ4

平声点B表記

語彙	意味	声点	注記	掲載書目	箇所
1 いは	<岩>	×平	朱圈点	①正濫抄	1, 21オ
2 いろ	色	×平	墨圈点, 「平」の注記	③通妨抄	1, 17ウ6
3 いろ	<色>	×平	朱圈点書入れ	④正濫抄	2, 1オ
4 おと	<音>	×平	朱圈点書入れ, 朱で「平」の書入れも	④正濫抄	3, 20ウ
5 いろえ	<兄>	××平	朱圈点書入れ, 「いろね」と刻されたものを朱で「え」と訂正,	④正濫抄	2, 1オ
6 いろけ(て)	<喘息>	××平	朱圈点	①正濫抄	1, 21オ
7 いろこ	<蜜脂>	××平	朱圈点	①正濫抄	1, 21オ
8 いろと	<弟>	××平	朱圈点書入れ	④正濫抄	2, 1オ
9 いろと	<弟>	××平	朱圈点	①正濫抄	1, 21オ
10 いろね	<兄>	××平	朱圈点	①正濫抄	1, 21オ
11 いろは	<母>	××平	朱圈点書入れ	④正濫抄	2, 1オ
12 いろくつ	<鱒>	×××平	朱圈点	①正濫抄	1, 21オ

平声点漢字表記

語彙	意味	声点	注記	掲載書目	箇所
1 公	<コウ>	平	墨園点印刷, 「平」本文注記印刷	②正濫抄	5, 47オ
2 公	<コウ>	平	墨園点	①正濫抄	1, 60ウ
3 茲	<ツる>	平	墨園点印刷	②正濫抄	5, 48オ8
4 茲	<ツる>	平	墨園点	①正濫抄	1, 61ウ
5 天	てん	平	墨園点印刷, 本文に「平声」	②正濫抄	5, 47ウ7
6 天	てん	平	墨園点	①正濫抄	1, 61オ
7 橋	<はし>	平	朱園点, 「平」の注記	③通妨抄	1, 58オ6
8 橋	<はし>	平	墨園点印刷	②正濫抄	5, 48オ7
9 橋	<はし>	平	墨園点	①正濫抄	1, 61オ
10 居	<をる>	平	朱書入れ, 園点	③通妨抄	1, 17ウ10
11 青葉	あをば	平×	朱園点, 「青」に“「」”の朱注記, 本文では平声輕	③通妨抄	1, 18オ5
12 青苔	あを<ノリ>	平×	朱園点, 「青」に“「」”の朱注記, 本文では平声輕	③通妨抄	1, 18オ5
13 井本	<キノモト>	平×	墨園点, 「平」	③通妨抄	1, 20ウ1
14 青羽の山	あをばのやま	平×××	朱園点, 「青」に“「」”の朱注記, 本文では「平声の輕」	③通妨抄	1, 18オ5

上声点平仮名表記

語彙	意味	声点	注記	掲載書目	箇所
1 いと	【副詞】	上×	朱書入れ, 園点, 「上声」	③通妨抄	1, 20オ9
2 いる	<傍>	上×	墨園点印刷	②正濫抄	2, 5オ
3 まひ	<舞>【名詞】	上×	墨園点, 本文で「上声」	③通妨抄	1, 38ウ9
4 いひね	<石蒜>	上××	朱園点, 朱で消したか	④正濫抄	2, 2オ
5 いとゞ	【副詞】	上××	朱園点, 踊り字濁点朱, 「上声」	③通妨抄	1, 20オ9
6 いとま	暇	上××	朱書入れ, 園点, 「上声」	③通妨抄	1, 20オ9
7 うたひ	<歌>【名詞】	上××	墨園点, 本文で「上声」	③通妨抄	1, 38ウ9
8 ごおけ	<小補>	上××	朱園点	③通妨抄	1, 17オ3
9 つかひ	<使>【名詞】	上××	墨園点, 本文で「上声」	③通妨抄	1, 38ウ9
10 ぬのこ	犬子	上××	墨園点, 「上」の注記	③通妨抄	1, 17ウ7
11 あをかつら	<防己>	上××××	朱園点	③通妨抄	1, 17オ4
12 いろこのみ	色好み	上××××	墨園点, 「上」の注記	③通妨抄	1, 17ウ6

上声点漢字表記

語彙	意味	声点	注記	掲載書目	箇所
1 江戸	えど	上×	墨園点, 「上」の注記	③通妨抄	1, 17ウ7
2 孔	<コウ>	上	墨園点印刷, 「上」本文注記印刷	②正濫抄	5, 47オ
3 孔	<コウ>	上	墨園点	①正濫抄	1, 60ウ
4 釣	<つる>	上	墨園点印刷	②正濫抄	5, 48オ8
5 釣	<つる>	上	墨園点	①正濫抄	1, 61ウ
6 端	<はし>	上	墨園点印刷	②正濫抄	5, 48オ7
7 端	<はし>	上	墨園点	①正濫抄	1, 61オ
8 猪飼	<シカヒ>	上×	墨園点, 「上/氏」の注記, さらに全体を朱で抹消	③通妨抄	1, 20ウ1
9 鴨河	<かもかは>	上×	朱園点	①正濫抄	1, 61ウ
10 鴨河	<かもかは>	上×	墨園点印刷, 本文「上声」	②正濫抄	5, 48ウ3
11 井上	ゐのうえ	上×	朱書入れ, 園点, 「去声点」を消して「上声点」に	③通妨抄	1, 17ウ7
12 井上	ゐのうえ	上×	朱書入れ, 園点, 「上」に追加	③通妨抄	1, 20ウ1
13 猪俣	<キノマタ>	上×	墨園点の「平」を朱点の「上」に訂正, 「平」の注記を朱で「上」に訂正, 「氏」の注記, さらに全体を朱で抹消	③通妨抄	1, 20ウ1

去声点平仮名表記

語彙	意味	声点	注記	掲載書目	箇所	
1	いと	<糸>	去×	墨圈点, 「去声」	③通坊抄	1, 20オ9
2	いる	<熬>	去×	墨圈点印刷	②正濫鈔	2, 5オ
3	あむ	<咲>	去×	墨圈点, 「去」の注記, <咲>も朱	③通坊抄	1, 17ウ7
4	おけ	<桶>	去×	朱圈点	③通坊抄	1, 17オ3
5	えぼし	烏帽子	去××	墨圈点, 「去」の注記	③通坊抄	1, 17ウ7
6	あづみ	井筒	去××	墨圈点, 「去」の注記	③通坊抄	1, 17ウ7
7	をさた	<他田>	去××	朱圈点書入れ, ただし声点にしては大 きすぎる	④正濫鈔	3, 7オ
8	をとこ	<少男>	去××	朱圈点書入れ	④正濫鈔	3, 2ウ
9	をとめ	<少女>	去××	墨圈点	③通坊抄	1, 17ウ9
10	をとめ	<少女>	去××	朱圈点書入れ	④正濫鈔	3, 3オ
11	をととり	<媒鳥>	去××	墨圈点, 「去声」の注記	③通坊抄	1, 17ウ9
12	いはむや	<況>	去×××	朱圈点	①正濫鈔	1, 21ウ
13	いろいろ	色々	去×××	墨圈点, 「去」の注記, 踊り字使用	③通坊抄	1, 17ウ6
14	をちごち	<彼此>	去×××	墨圈点	③通坊抄	1, 17ウ9
15	をちごち	<彼此>	去×××	朱圈点書入れ	④正濫鈔	3, 3ウ
16	みやまをろし	<深山嵐>	×××去××	朱圈点「みやま」も朱, 「をろし」へ の注記では	③通坊抄	1, 17オ3

去声点漢字表記

語彙	意味	声点	注記	掲載書目	箇所	
1	貢	<コウ>	去	墨圈点印刷, 「去」本文注記印刷	②正濫鈔	5, 47オ
2	貢	<コウ>	去	墨圈点	①正濫鈔	1, 60ウ
3	鶴	<つる>	去	墨圈点印刷	②正濫鈔	5, 48オ8
4	鶴	<つる>	去	墨圈点	①正濫鈔	1, 61ウ
5	箸	<はし>	去	墨圈点印刷	②正濫鈔	5, 48オ7
6	箸	<はし>	去	墨圈点	①正濫鈔	1, 61ウ
7	井戸	ゑど	去×	朱書入れ, 圈点	③通坊抄	1, 17ウ7
8	井戸	ゑど	去×	朱書入れ, 圈点, 「去」に追加	③通坊抄	1, 20ウ1
9	天狗	てんぐ	去×	墨圈点印刷, 本文に「去声」	②正濫鈔	5, 48オ2
10	天狗	てんぐ	去×	墨圈点	①正濫鈔	1, 61オ
11	天女	てんにょ	去×	墨圈点印刷, 本文に「去声」	②正濫鈔	5, 48オ2
12	天女	てんにょ	去×	墨圈点	①正濫鈔	1, 61オ
13	井筒	<キツ>	去×	墨圈点, 「去」	③通坊抄	1, 20ウ1
14	媒鳥	<をとり>	去×	朱圈点書入れ	④正濫鈔	3, 2ウ
15	尾張	<をわり>	去×	朱圈点書入れ	④正濫鈔	3, 2オ
16	上野	<かんつけ>	去×	墨圈点	①正濫鈔	1, 58ウ
17	天神	てんじん	去×	墨圈点印刷, 本文に「去声」	②正濫鈔	5, 48オ2
18	天神	てんじん	去×	墨圈点	①正濫鈔	1, 61オ
19	天台	てんだい	去×	墨圈点印刷, 本文に「去声」	②正濫鈔	5, 48オ2
20	天台	てんだい	去×	墨圈点	①正濫鈔	1, 61オ
21	天王	てんわう	去×	墨圈点印刷, 本文に「去声」	②正濫鈔	5, 48オ2
22	天王	てんわう	去×	墨圈点	①正濫鈔	1, 61オ
23	鴨社	<かものやし ろ>	去×	朱圈点	①正濫鈔	1, 61ウ
24	上総	<かんつふさ>	去×	墨圈点	①正濫鈔	1, 58ウ
25	鴨社	<かものやし ろ>	去×	墨圈点印刷, 本文「去声」	②正濫鈔	5, 48ウ3